

第 28 回東海川崎病研究会

期 日：2008 年 6 月 14 日（土）午後 2 時 30 分～6 時 00 分

会 場：愛知県医師会館 地下 1 階「健康教育講堂」

1. 当院における川崎病治療 ～ γ グロブリン不応例の早期検出についての検討～

公立陶生病院小児科

高岡範子，足達信子，山口英明，家田訓子，森下雅史，加藤英子，
岸本泰明，多賀谷亜実，奥田美津子，大江真由香

川崎病に対して，強い炎症反応を早期に終息させるため，免疫グロブリン静注療法が行われる．しかし，治療に反応せず，免疫グロブリンの追加投与が必要となる不応群が存在する．今回，当院で 3 年間に経験した 83 症例について，不応群と反応群にわけ，入院時の血液検査などについて後方視的に検討したところ，いくつかの指標で有意差をみとめ，不応例を予測する指標となりうるのではないかと考え，結果を報告する．

2. 当院における川崎病症例の検討

社会保険中京病院小児科

柴田元博，長野美子，山田晃郎，渥美 愛，都築一夫

最近 5 年間に当院で治療を行った川崎病 55 症例について検討した． γ -グロブリンは 43 例（78.2%）に投与され，総投与量は 1 g または 2 g/kg の例が 40 例と多かった．3 g/kg 以上の投与は 3 例で，うち 1 例が不応例のためメチル・プレドニゾロンのパルス療法を行った．急性期の冠動脈病変は 4 例（7.3%）に認められた．4 例中 2 例は生後 3 カ月と 4 カ月の乳児で，うち 1 例は γ -グロブリン不応例であった．1 年後の心臓カテーテル検査では，1 例に冠動脈病が認められた．

3. 3 ヶ月以下で発症した MCLS 症例の検討

名古屋第一赤十字病院小児科

大森大輔，羽田野為夫，生駒雅信，河井 悟，永田佳絵

幼若乳児の川崎病は低頻度で，その実態は不明な点が多い．最近，急性期心血管障害の発生頻度が生後 120 日未満で 25% 以上の高率との報告がある．

当院で経験した 4 カ月未満の川崎病症例 14 例（対照 162 例）の後ろ向き検討でも，急性期の冠動脈病変は乳児期早期で高率だった（35.7% 対 17.9%）．ただ，断層超音波の冠動脈径評価で z-score を比較したが有意差はなかった．自施設での検査方法の統一化と，症例数の蓄積が今後の課題となった．

4. 川崎病後遠隔期の冠動脈病変におけるプラークイメージング：

Virtual Histology-IVUS を用いた検討

三重大学大学院医学系研究科小児発達医学

三谷義英, 大橋啓之, 早川豪俊, 駒田美弘

川崎病後遠隔期における grayscale と virtual histology (VH) IVUS 所見の定量的解析の検討を行った。局所性狭窄において、Grayscale IVUS では、外弾性板で囲まれた血管断面積－内腔断面積／血管断面積が高値で、VHIVUS 上は、内膜病変の成分の fibrous (F) ではなく dense calcium (DC), necrotic core (NC) and fibrofatty (F) areas が病変形成に関与した。

5. 川崎病後の冠動脈瘤に対してACバイパスを施行した一例

あいち小児保健医療総合センター循環器科

沼口 敦, 足達武憲, 福見大地, 安田東始哲, 長嶋正實

あいち小児保健医療総合センター心臓外科

横手 淳, 鶴飼知彦, 角三和子, 前田正信

【症例】30歳男性。1歳時に川崎病に罹患し巨大冠動脈瘤を形成した。冠動脈造影にて#1完全閉塞と#7巨大冠動脈瘤。運動負荷で有意所見はないが、心筋シンチグラムで無症候性虚血。左内胸動脈(LITA)－左冠動脈・骨動脈グラフト(RA)－右冠動脈の2枝バイパスを施行した。術後冠血流はよく維持され、左室収縮能も改善した。【結語】心筋シンチグラムは無症候性虚血の検出に有用である。今後のバイパスの開存性につき、経過観察を要する。

6. 心筋炎を合併した川崎病に血漿交換療法をおこなった一例

名古屋第二赤十字病院小児科

岩佐充二, 後藤芳充, 山川 聡

聖霊病院小児科

佐橋 剛

＝抄録なし＝

7. 川崎病におけるプロカルシトニンの測定意義

聖隷浜松病院小児科

伊藤雄介, 大高幸之助, 横田卓也, 宮原 純, 長崎理香, 大呂陽一郎,

藤田直也, 中畷八隅, 松林里絵, 武田 紹, 榎日出夫, 松林 正

川崎病確定例におけるプロカルシトニン(PCT)の関連を検討し、PCT最高値29例とγグロブリン静注療法(IVIG)施行前のPCT値23例を得た。PCT値がカットオ

フ値以下のものが 10 / 29 例あり, PCT は川崎病の診断に有用とは言えなかった. また重症度との関連を IVIG の施行回数群別に検討したところ, 統計学的な有意差はでなかったが施行回数が多い群ほど PCT 値が高い傾向が示され, PCT 値は重症度診断に有用である可能性があると思われた.